審査結果の要旨

報告番号	甲　第 1234 号	氏名	福永 秀平
審査担当者	主査	赤木由人 (印)	
	副主査	矢野博久 (印)	
	副主査	溝口充志 (印)	

主論文題目：

Detection of calprotectin in inflammatory bowel disease: Fecal and serum levels and immunohistochemical localization

炎症性腸疾患における calprotecti 測定の意義：便中、血中、そして免疫組織学的局在

審査結果の要旨（意見）

炎症性腸疾患を代表する潰瘍性大腸炎やクローン病は本邦で増加傾向にある。これらの疾患は原因不明の難病であり、その病態と重症度の判定は臨床診断に頼ることが多い。それらの判定には臨床的スコアや内視鏡スコアが多く用いられている。これらの疾患の治療目標は粘膜治癒との見解から、福永らはより簡便で、非侵襲的な検査から重症度判定が可能であるかの研究を遂行した。本研究はその指標として便中カルプロテクチンの測定を用いて検討したものである。方法としては全身の炎症程度である血液データと、局所の程度を内視鏡所見と比較している。その結果はおおむね相関しており、特に潰瘍性大腸炎の活動性判定に有用なものであった。したがって繰り返す入退院、定期的検査や経済的負担など潰瘍性大腸炎患者の QOL（精神的にも身体的にも）を著しく低下させている部分の軽減に期待できるものと思われる。またこの測定によって個々の症例の治療効果判定や治療法の変更に利用できるかなど興味のあるところである。一方で、このような局所での判定のみで疾患の重症度として決定して良いものか疑問は残る。この研究成果が今後臨床的に活用できる可能性を見出した点では非常に意義のあるものと考える。

論文要旨

便中カルプロテクチン(FC)は炎症性腸疾患(IBD)の疾患活動性を知るための非侵襲的サロゲートマーカーとして期待されている。本研究の目的は、FC[ELISA]と内視鏡的重症度、臨床的重症度、血液生化学検査、便潜血との相関関係を調べる事である。ELISA 法よりも簡便でベッドサイドで即座に測定可能な point of care test(POCT)の開発も進んでおり、FC[ELISA]と FC[POCT]、血清カルプロテクチンの相関関係、免疫組織学的検査を用いた大腸におけるカルプロテクチンの局在についても調べた。対象は潰瘍性大腸炎(UC)113 例、クローン病(CD)42 例。FC[ELISA]は内視鏡的重症度、臨床的重症度、血液生化学検査と UC においてより強い相関を認めた。便潜血も UC では FC[ELISA]と同様の相関関係を示した。FC[ELISA]は FC[POCT]と UC でも CD でも強い相関を示したが、血清カルプロテクチンと相関は認めなかった。免疫組織化学的検査で、IBD では健常人よりもカルプロテクチン陽性の好中球及び単球が多く発現していることが示された。本研究の結果は、主に活性化された好中球および単球から誘導される FC が、特に UC の疾患活動性を知るための非侵襲的なマーカーであることを示している。 また、POCT は FC の簡便な測定法として有用であることが示唆された。